



微笑

第74号
令和7年10月15日
発行者
綾瀬市身体障害者
福祉協会

☆ 令和七年度綾瀬市 社会福祉表彰式

十月四日、綾瀬市オーエンス文化会館にて「綾瀬市社会福祉表彰式」が行われました。今年度は肢体部会部会長の西山和夫さんが、綾瀬市社会福祉協議会より表彰されました。西山さんは、最初は「山水会」に入会されました。その後、身障協会の一員となり、部会長として十年頑張ってくれたので、今回の表彰となりました。



身障協会の他の役員は、四年ほど前に同じ表彰を受けています。西山さんは部会長として、部会の旅行、食事会などを計画・実践されてきましたが、近年は部会員の減少で行事の計画が立たないことが、他の部会と同様に悩みのようです。また、身障協会全体でも会員減少に頭を悩めています。一人でも多くの障害を持つ人に協会に入ってもらい、活躍してもらえんことを願っています。西山さん、おめでとございます。

☆ 「福祉ふれあい祭り」& 「夢アート展」共同開催

九月二十八日、「あやせ福祉ふれあいまつり」&「あやせ夢アート展」が、綾瀬市オーエンス文化会館で開催されました。毎年十二月に開催されていた綾瀬市当事者団体連絡会が主催する「夢アート展」は、今年は社会福祉協議会が主催する「福祉ふれあいまつり」との合同開催となり、より多くの市民が福祉と芸術の両方に触れられる場となりました。



「夢アート展」は、小ホール前に特設展示スペースが設けられ、障がいのある方々が一つひとつ丁寧な作成した作品が並び、観る人の心に深く響くものが多くありました。



小ホールでは、福祉団体や施設、ボランティア団体による活動紹介やステージ発表が行われ、会場は笑顔と活気に包まれていました。

また、食品や物品の販売コーナーでは、地域の人々が手作りの味や品物を通じて交流し、消防車の展示には子どもたちが目を輝かせて集まるなど、世代を問わず楽しめる場になっていました。

今回の「夢アート展」と「福祉ふれあいまつり」の合同開催は、福祉の輪を広げ、地域全体で支え合う社会をつくるための大きな一歩になったように感じました。来年以降もこの流れが続く、さらに多くの方に障害や福祉への理解が広がっていくことを願っています。

☆ 車いすで行ってみた 「道の駅湘南ちがさき」

車いす部会 金子寿

今年の七月七日にオープンした「道の駅 湘南ちがさき」。湘南エリア初の道の駅ということで、話題になっていたので行ってみました。

綾瀬スマートICを使って新湘南バイパスに入り、茅ヶ崎海岸ICで降りるとすぐ目の前。高速を降りてからも分かりやすく、迷わず到着できました。車でのアクセスの良さは、この道の駅の大きな魅力だと思います。駐車場も広くて約160台分のスペースがあり、障害者用の駐車スペースも複数設けられていました。



館内に入ってまず感じたのは、「誰もが使いやすい」ことを意識した設計です。エントランスには自動ドアが設置され、段差のない床面が続いています。車いすでもスムーズに移動できる広さが確保されています。

トイレは館内と屋外にあり、どちらもバリアフリートイレが完備されています。特に屋外トイレは二十四時間利用可能で、オストメイト対応設備や介助者と一緒に入れる広さがあり、安心して利用できます。ベビーカーを使う家族や高齢の方にとっても同じように便利で、まさにユニバーサルデザインの考え方が随所に感じられました。また、館内の案内板やサインも見やすく、文字とイラストが組み合わさっていて分かりやすかったです。

食事の楽しみも大きな魅力です。二階のフー・ドコートでは、「ゆーまん丸食堂」の舟盛り定食が目を引きまします。豪華な海鮮が大皿に盛り立ていて、見ても食べても満足できる一品でした。他にも、茅ヶ崎のご当地グルメ「茅ヶ崎メンチ」を提供するお店や、地元野菜を使った創作料理のお店などもあつて、どこにしようか？と迷うほどでした。テラス席もあり、潮風を感じながら食事できるのも魅力です。



さらに注目したいのが、物販コーナーです。ここでは湘南・茅ヶ崎ならではの名産品が揃っています。しらすや干物、新鮮な地元野菜に加えて、湘南ビールや茅ヶ崎ザンカレー、湘南ゴールドを使ったお菓子など、ここでしか手に入らないものも沢山ありました。

「道の駅 湘南ちがさき」は、ただ立ち寄る場所ではなく、誰もが安心して楽しめる交流の場として作られていると感じました。綾瀬からアクセスしやすく、バリアフリー面でも安心。障害があっても、家族や仲間と一緒に「行つてみたい」と思える場所です。

こうした施設が増えることで、私たちの選択肢も広がり、社会参加の機会が豊かになっていくのだと実感しました。ところで、綾瀬市で計画されていた「道の駅」はどうなりましたか？



☆デフリンピック開催

静かな挑戦に熱い支援を

八月二十三日配信

聴覚障害者の「デフリンピック」が11月15日から日本で初めて開催される。耳が聞こえない意味の英語「デフ」とオリリンピックの合成語で、第1回パリ大会から百周年になる（原則4年ごと、冬季は49年から）。

70〜80カ国・地域から役員らを含め約六千人が参加、21競技が東京都と福島県、静岡県で実施される。ボランティアも三千人超に膨らむ見込みだ。参加資格は補聴器なしで聴力損失55デシベル超（静かな場で会話

が聞こえにくいレベル以上、競技中の補聴器使用は禁止。

陸上のスタート時には電子音ピストルと連動してランプが発光する。赤は「位置について」、黄は「ヨーイ」、緑は「ドン（号砲）」。「柔道の審判は選手の肩をたたいて「始め」、サッカーやバスケットボールではレフェリー全員が旗で多方面から指示・判定を伝える。選手たちの能力は高い。五輪大会にも出場し、競泳、レスリング、バスケットボールなどでメダル獲得の実績がある。パラリンピック（60年開始）との合同も検討されたが、独自の歴史や障害特性などで折り合わなかった。

「ろう者の五輪」は、障害への社会的な理解を広げる歩みだった。音声言語と同様に手話も各国で異なるが、例えば手をヒラヒラさせる「拍手」は共通だ。冬季大会のスタッフを務めた女性は、こう振り返る。「拍手の代わりに頭の上でキラキラ星の歌を歌うときのように両手をクルクルさせる、選手がゴールするたびに、大勢の応援者から一斉にクルクルの拍手が舞う。メダル決定の瞬間、監督・スタッフ・選手がコミュニケーションの壁を越えて、喜びを分かち合うシーンは心に響いた」

まだまだ知名度は低く、関心を高めようと、大会運営委員会は、入賞メダルのデザインを全国の小中学生約八万人の投票で決めた。各地で地元選手が学校で手話を教える試みも続く。都内の関連施設では音声を多言語で示すディスプレイが設置された。東京メトロとヤマハは協力して地下鉄駅で「みえるアナウンス」を

始めた。パネルにスマートフォンをかざすか、QRコードを読み取ると構内放送を文字化できる。

一方、超党派の議員連盟が「手話施策推進法」を先の国会で成立させた。要旨は国と自治体の総合的な責務を定め、財政措置を講じること。手話のできる教職員の養成・配置、地域や職場で聴覚障害者への情報提供の拡充などを盛り込む。手話通訳の普及を含め具体的な予算確保が宿題になる。デフリンピックが次第に熱を帯び始めたのは喜ばしい。

編集後記

日中はまだ汗ばむ陽気ながら、夜には虫の音が響き、ようやく秋の訪れを知らせてくれる季節となりましたが、皆さんはお元気ででしょうか？私は体調を崩してしまい、八月の後半に二週間ほど入院をしました。退院して一ヶ月半ほどが経ちますが、体調はまだ万全ではありません。

今年は、十一月に社会福祉協議会主催の「福祉レクリエーション大会&秋の交流会」、十二月には県身連主催の「県大会」が伊勢原市での開催が予定されています。私もそれまでには何とか体調を整えて、皆さんにお目にかかりたいと思っています。この時期は体調を崩しやすいので、皆さんも体調管理にはくれぐれもお気をつけください。読書の秋と共に「微笑74号」をお届けします。

西川 和朗